敷田年治翁傳

163
112

163-112
1200800080842

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

序

この小著は「敷田年治翁のことども」と題し、關西日報紙上に十數日に亘り、連載した記事に、多少の增補を爲し、上梓するに至つたものである。從つて此書は本文中にも述べた如く敷田翁の詳傳ではなく、唯その一生の經歷を簡單に叙し、翁の人物、學問等に就て、一通りの觀察を試みたに過ぎぬ。今日までその故舊門人以外、殆んど知られざりし翁の事蹟が、これに依つて幾分にても世に現はるれば、著者にとつては幸である。本書の資料は主として、翁の愛弟子たりし豊國神社々司角正方氏より仰ぎ、またその出版に就ては畏友室谷鐵腸氏の一方ならぬ援助を受けた。共に茲に記して、その芳情を感謝するものである。

大正十五年三月上浣

高梨光司

帝國圖書館藏
大正 15. 4. 29 内交

述懐

限ある命なりともえるふみの
撰もはてなく吾世すぎめや

敷田年治

敷田年治翁傳

高梨光司著

本書執筆の動機

嘗て大阪府立圖書館で、大阪名家著述展覽會が開かれて、長流、契沖以下大阪の和漢學者の著述手稿が展觀されたことがあつた。その時、場の一隅に大小數百の手稿本が堆く積んで出されてあるのを見た。その中には「國典字徵」の如き、厖然五十餘册に及ぶ大著述もあつた。私はそれを目擊した瞬間、一種いふべからざる衝動を覺えたのであつた。學者一代の勞作――その精力の結晶――尊ぶべき事業――種々の感慨が早鐘の如く胸を打つたが、偖て飜つてその手稿の筆者はと見ると、敷田年治翁であつた。大阪に敷田年治といふ國學者のあつたことは、豫て承知して居た。この人の著「古事記標註」「日本紀標註」などは、嘗て鹿田から買つて、讀んだこともある。「音韻啓蒙」といふ本も覗いて居

た。然し未だ刊行されぬ著述が斯の如く多數あらうとは、淺學寡聞な私は、この時まで知らなかつた。

その後折にふれ時につけ、敷田翁を研究するにつれて、この人が近世國學者として、最も出色ある一人であることを確めた。大阪に於ては、長流、契沖以下幾多の國學者が輩出したが、尠くとも翁はその最後を飾る人である。否、大阪といはず同時代の天下の國學者と伍して、充分覇を爭ふに足る人物であつた。

然るにこの人の事蹟なるもの、僅に現存せる二三門下の間に傳承するに止まり、未だその經歷の一半すら世に公にされたるを聞かぬ。是れ私が年來遺憾としたところで、他日閑を得ば、不敏と雖も自ら起稿せんと欲したのであつた。今回本文を執筆するに至つたのも、その志の一端を現したもので、故翁の人物學殖を世に紹介せんとするの微衷に外ならぬ。

勿論本文は敷田翁の詳傳ではない。否、畧傳といふも如何であらう。翁の傳記をものするには、別にその人がある。私は唯翁の經歷の梗概を延べその學問、思想、性行、趣味に言及して、翁の一生の輪廓のデッサンを描くに過ぎぬ。この點を前以て御斷りして稿を進めたいと思ふ。

敷田翁の出生及び少青年時

敷田年治翁は、文化十四年七月二十日、豊前國宇佐郡敷田邑に生れ、童名を主計之介又は上總と稱した。家は世々神官で、翁の父兼繼も八龍宮の社司であつた。翁は幼にして聰明頴悟であつたが、早く父に後れ、母手一つで養育された。而も何の事情ありてか十五歳の時、家を脫し、諸國を流浪する前後五年に及んだ。

この間翁は諸家を歷訪して國典の硏鑽に努めた。後年翁はあれだけの大學者となつたが、翁の國學には、常師といふものがない。思ふに翁はこの神氣英發する十五より二十の間に於て、巨多の國典を讀破渉獵し、獨學自修したものであらう。而して二十二歳の時、蛭兒神社の神職吉松能登守の養子となり、名を仲治と改め同神社の祠官に任ぜられた。是れ天保十年二月のことである。

帆足萬里塾入門

後、年治と改名して、帆足萬里の塾に入り、漢學を修めた。萬里が三浦梅園、廣瀨淡窓

と共に鎭西の三學者と呼ばれたことは、茲に說くまでもない。彼は嘉永五年、七十五を以て歿した。敷田翁が萬里の門に學んだのは、何時頃であるか。正確なる年時は分らないが、兎も角も萬里晚年の門弟であつたことは、爭はれぬ事柄である。

萬里の門下としては、毛利空桑、岡松甕谷、高谷龍洲、中村三蕉、宇津宮龍山、福澤百助、難波立達等有名である。而も翁の名の未だ聞ゆるなきは如何。思ふに此は翁が萬里塾最晚年の門人であり、且つ、その名を爲すに至らざる前に、萬里は逝き、翁も亦その門を去つた故であらう。

翁の江戸遊學

敷田翁がその志を立てゝ、單身江戸に出たのは、嘉永六年正月、翁三十七の年であつた。是れより先、翁は中津藩士庭田新兵衛の女ますを娶つて、一子左馬之介を擧げたが、嘉永五年早世した。而してその恩師帆足萬里亦同年歿したのであるから、翁は悲歎に吳れたのであつたが、斯くてはあらじと、奮然蹶起して、江戸に遊學したものであらう。

或ひは翁のこの江戸行を以て、遊學とするは當らぬかも知らぬ。當時、翁年既に不惑に近く、和漢の學に於て、優に一家を爲して居た。從つてその標置するところも高く容易に人に許さなかつた。翁は江戸に上るや、傳手を求めて番町の塾に塙次郎を訪ひ、贄を執つて入門せんとしたが、その師事するに足らざるを見て、當初の志を擲つた。

當時の顚末は、翁が嘉永六年七月實母茨子に送つた書翰に現れて居るが、その文中「甸匐して敎を受候程の義無御座候」云々に至つて、當年の翁の面目、躍如たるものがある。

塙次郎略歷

塙次郎名は忠寶、保己一の子にして、忠韶の父である。前田健助と共に幕府の命を受け、廢帝の舊記を調査せるの嫌疑に依り、文久二年勤王浪士の爲めに害に遭ふた。後の公爵伊藤博文が、その刺客中の一人たりしは、著名なる事實である。

和學講談所敎官

これから文久二年二月和學講談所の敎官になる迄の數年間は、翁にとつて、最も苦艱の時代であつた。翁が敷田大次郎と改名して、旗本の士竹村忠三郎の侍者となり、或ひは夏目杢之助の用人となり、更に轉じて高橋美作守、蜂屋重次郎等の家來となつたのはこの時

代であつて、その目的は當世に志を得んとしたのであらうが、一つはまた流浪中に於ける生活の方便でもあつた。

翁が林大學頭の管理に屬し塙家の經營に成る和學講談所の敎官に推薦されたのは、どういふ因緣であるか。未だこれを審らかにするを得ぬが、翁が安政以來、武家勤務の傍、絕えず硏鑽を續けたことは事實であつて、現にこの時代に「假名沿革」其他の著述もある位だから、學名漸く江都に高く、この結果を見るに至つたものであらう。

爾來慶應の半頃まで、前後五年間、翁は和學講談所に於て、國文を講じた。而して其間に於て、翁終生の莫逆であつた鈴木重胤、黑川春村と相知るを得た。鈴木は平田系統の俊足であり、夙に學殖淵博一世に聞えた學者であつた。彼が文久三年夏の遭難は、所謂喬木風に倒れたもので、其原因は何れにあるにせよ、眞に遺憾の極みであつた。（翁と重胤の關係は後章に詳說する）

鈴木重胤略歷

鈴木重胤は、淡路國津名郡仁井田村の出身、その學統は、大國隆正、平田篤胤より受く。而も篤胤の學風に慊らず、自身發明する所ありしが如し。文久三年八月十五日黃昏二士あり、松平山城守の使と稱し、本所小梅の僑居に來り、重胤に面し、卒然刀を拔いて斬る。重胤斃れ、其子重乘傷く。

和學講談所の由來

和學講談所は、和學所とも云ひ、國書を講習し、之を調査編纂する所であつて、寬政五年塙保己一が幕府の許可を得て設立したものであり、林大學頭の支配に屬し、講談所永續の手當として、町屋敷を賜ひ、年々收むる所の五十両（後七百両）を以て、雜費に充てしめた。塲所ははじめ裏六番町にあり、後表六番町に移る。明治元年六月廢止さるゝに至るまで、國學百般の講習を續けたのであつた。

勤王志士と交はる

王政維新に際しては、翁も亦勤王の志士の列に交はり、その運動の渦中に投じて、屢々危地に出入した。翁が大隈連、苗木百助、敷田藏人等と變名し、數回居を轉じたのは幕吏の捕縛を免るゝために外ならなかつたのである。

而かも翁の本領は、何處までも學者であつた。翁は國事に奔走して、寧日なき時も、その手に書卷を釋てなかつた。否、寸暇を偸んで、吃々として勉强した。未完結ではあるが翁畢世の大著といふべき「國典字徵」の如き、實にこの前後數年間に成つたものである。

翁と櫻田志士斬奸狀

翁のこの間の事蹟甚だ明瞭ならず。或ひは萬延元年水戸の浪士十餘名が井伊直弼を櫻田門外に斃したる時、佐野竹之助が懷中したる斬奸狀は、翁の起草に係るといふも、文獻の徵すべきものなし。翁はまた生麥の變にも關係あるやに聞くも、是れまた確ならず。後日の考證を俟つ。

大阪に來る

慶應四年六月、翁は江戸築田島より乘船、七月大阪に着き間もなく大阪國學講習所の講師として迎へられた。茲に翁の前生涯の幕は閉され、後生涯の大阪生活に入つたのである。翁時年正に五十二歲。その人物は圓熟して妙境に入り、その學問は、蘊奥を極めて該博到らざるなきの時であつた。

明治二年十月のことであつた。佐土原藩士野田丹彦の推薦により敷田翁は島津忠寬侯に抱へられ、同藩士として、騎馬の待遇を受け、道修町四丁目に藩校を設けて、國典を敎授することゝなつた。國學者としての翁の名聲が關西の天地に鳴り響いたのはこの時である。幾許くもなく廢藩置縣となり、藩籍の奉還が行はれ、佐土原藩の藩校も閉ぢたので、翁が敎鞭をとつた間は近々二年に過ぎなかつたが、その名聲を聞き、遠近笈を負ふて入學する者、數百人に及んだ。

翁は學者の本分として、世間的の功名富貴は、敢て望むところでなかつたであらう。然しこの時代は、充分の俸祿を得、米鹽に事缺かずして、學業にいそしみ、一面また士分としての地位も、高かつたのであるから、翁としても得意の時代であつたであらう。

敷田翁西下の眞因

敷田翁が江戸を捨てゝ、大阪へ來つたのは、全くその身邊に危險を感じた爲めである。翁が久しく幕府と關係深き和學講談所に職を奉じ乍ら、勤王志士と共に國事に奔走したことは、いたく幕士の怒を買つたことであらう。翁は全くその難を避くるために、大阪へ來たのであつた。

隱遁生活

明治五年十二月、敷田翁は大阪の居を引拂つて、河内國茨田郡門眞四番村に移つた。これより翁の隱遁生活が始まつた。この時代の翁は、眞に晴耕雨讀の境涯であつた。地は華城の東郊數里のところであるが、市塵を離れ、俗累を絕ち、天地悠々の思ひを抱いて、讀書

三昧に暮すには、最も恰適の場所であつた。

從つて翁多年の蘊蓄は、この時に至り、大部の著述となつて現れた。後年刊行されて我等の惠に浴した「古事記標註」「音韻啓蒙」を始め、未刊行の「西籍新論」以下數十部の著は、實にこの時代の產物であつて、翁の隱遁生活は、孤獨寂寥、巖穴の隱士にも似た生涯であつたが、一意專心著述に耽り、後世に知己を俟つには、却つて好都合であつたとも云へる。

翁の出廬　神宮皇學館敎頭

十年河内の片田舍に閑居して、隱遁生活を送つた敷田翁は、明治十四年に至り、伊勢神宮祭主　久邇宮朝彥親王殿下の臺命を拜し、神宮皇學館の敎頭となり、傍、久邇宮岩磨王(後の賀陽宮殿下)の侍讀を兼ぬるに至つた。

茲に於て翁は再び六十五の老軀を提げて、敎壇に立ち子弟の提撕に當ることゝなつた。蓋し學者としての翁の器は、永く草澤に埋もれしむべきではない。これを當世に用ゐて、學問に利するは、當然のことであつて、翁に臺命の下つたのも所以なきにあらずである。

翁は神宮皇學館の敎頭として、前後三年を伊勢で送つたが、十六年病の故を以て河内に歸り、暫く靜養した。而して同二十一年又大阪西區北堀江御池橋に轉居し、私塾を開いて國學の敎授をなした。當時翁の學德は齡と共に高く、その人格を敬慕して門に集まる者も甚だ多かつたのである。

後その居を白髮橋通繁榮橋北に轉じ、更に東區上本町五丁目に移つて、明治卅五年一月八十六の高齡を以て逝去した。是れ一代の國學者敷田年治翁の傳記の梗概である。

讀書無倦

敷田年治

學柱、まなひの業は、遂がたく、あきらめがたく、大方は、なかはにいたらすして、淀み果つるぞ、おほかめるを、椎柴の、しひて促し、梓弓、おしていさむさはすれど、其心なき人は、文机に向ひて、うちまさろみ、涎りを流し、さし並の、隣の少女が、機おろ歌に、耳をかよはしめ、心を空に、たさろらんは、口をし。あはれ、一くたりの書よむにも、物きくにも、心をさゝめて、よく思ひ味ひなば、藻に住むむしの、われから、其理をあきらめ、終に身をたて、名をなさんさするも、よみ〳〵て、うむ事なきぞ、その糸口なる。

敷田翁のことども

翁の學殖

敷田翁の傳記の概畧は、先づざつと以上述べた如くである。これから翁の學問、思想、性行、趣味等に就て、一通り觀察して見やうと思ふ。尤も私は敷田翁の著述のほんの一部を讀んだ丈で、未刊行の著述には、殆ど眼を通して居ない。從つて私が今日の程度で翁の學問を論評するは、頗る烏滸の沙汰であり、所謂群盲象を評するの結果となるかも知れぬ。この點も前以て御斷をして置く。

敷田翁は國學者として、同時代の第一流であり、その本領も國學にあつたのであるが、一面漢學の素養も極めて深かつた。前にも述べた如く、翁の國學は殆ど獨學自修で、常師といふものがないが、漢學は帆足萬里の塾に於て、みつちり叩き込んだのである。或は一說によると、萬里門の塾頭を勤めたとのことであるから、その研學の程も推し測られる。また實際に於て、翁の遺著に就て見るも「西籍雜纂」の如きは、廿一史以下經、史、子、集八十餘部に據つて、人名、地名、言語、雜事等を抄錄し、五十音順に次第した漢籍の索引であつて、翁が漢學百家に亘つて、讀破涉獵したことが分る。「國典字徵」編纂の如き、亦漢學が蘊奧を極めずして、成就し得べきものではない。

清原氏翁の學殖に驚嘆す

高津宮の祉司に清原眞弓と云ふ人があつた。日向高鍋藩の出で、藩主秋月侯の御守役として、安井息軒の門に遊び、維新後官途に就て久しく司法官を勤めた人で、頗る漢學の出來た人であつた。この清原が一日敷田翁を訪ねたところ、談漢學に及ぶや、廿一史の講釋を前後三時間に亘り、立續けに聽かされ、翁の學殖の深奧なるに驚嘆したとのことである。而も翁は常に國學者を以て任じ、漢學を以て立うとはしなかつた。

考証と音韻

敷田翁の學問の特色は、諸種の考證に重きを置いた點に存する。翁の國學は考證が主であつて、この點は、翁の先輩たる伴信友の學風に頗る類似する。翁も亦、伴信友に私淑し、常に門人に向つて、信友の學問の遺方は國學の研究には最も適したものであると語つて居

たとのことである。

從つて翁の著述の大部分は考證に關係があるものである。前掲、翁畢世の大著「國典字徵」を始め「班田考」「戶籍雜徵」「風土記考」以下數百部の著述一として考證の記錄ならざるはない。盖し古典の考證は翁の最も得意としたところであり、その終世の努力は、大部の著述となつて殘つたのである。

音韻の學にも、亦翁は詳はしかつた。明治七年に刊行された「音韻啓蒙」の如き、その蘊蓄の一端を披瀝されたものであるが、頗る創說に富み、今日なほ斯學の好參考書である。律令の研究も亦翁の忽せにしなかつたところで、晚年塾生に講義した「令義解」の如き、前後數年に亘り、博引旁證、到らざるなかつたといふ。

萬葉集と祝詞の解釋

敷田翁の學說には、獨創の意見が多かつた。そのため時には辟說もあつたが、概して一家の說として、傾聽すべきものが多い。

今、その一二を擧げて見ると、萬葉集卷一「藤原宮役民作歌」の解釋で、この歌中の「不知國依。巨勢道從。我國者。常世爾奈牟」は、契冲、眞淵以下萬葉の學者は、「知らぬ國より、巨勢道(こせぢ)より我國は常世にならむ」と訓み、巨勢道を紀伊から大和に通ずる街道の地名と解釋して居たのであつた。

このためこの歌の解釋に大分無理があつたが翁はこれを「不知國依(しらさりしくにをもよさし)。巨勢道從(おほみいづとほりましゝゆ)」と訓み、巨勢が地名であると解釋した從來の諸說を排擊して、これ迄何人も考へ及ばなかつた一家獨創の說を立てたのであつた。

それからまた祝詞の「出雲國造神賀詞(イヅモノクニノミヤツコカムヨゴト)」中の「此方能(コナタノ)古川岸爾(フルカハギシニ)生立(ヲヒタテル)。若水沼間能(ワカミヅクルスノ)彌若叡爾(イヤワカイニ)御若叡生(ミワカイマシラ)。」は、宣長以來「古川の此處彼處の岸に生ひたる栗の林の若く榮えたる如く益々若やかにましませ」と解し「沼間(クルス)」を「栗栖(クリス)」の意味にとり、栗の林と說いて居たのであつたが、翁はこれを「若水陀間(ワカミツタマ)」と訓み、「みづだま」を漢名穀精草の和名であるとし、一種の草と解釋したのであつた。この「みづだま」は川邊に生へる草であるから、從來栗の林などゝいつた不自然な解釋が、これに依つて、最も自然に說明が出來るやうになつた。

これは翁の學説中の斷片的なものを一二擧げたに過ぎぬが、一班以て、全豹を推するに足る。翁が學問上、他に追隨し、或ひは附和雷同するを屑しとせず、常に一家の見を立てたことは之に依りても知るべきである。

敷田翁にはまた一面奇説或ひは辟説と稱すべきものもあつた。その著「野槌考」に於て、人間の祖先は蛇であるとの意味の説を立てた如きその一例である。

藤原宮役民作歌

八隅知之。吾大王。高照。日之皇子。荒妙乃。藤原我宇倍爾。食國乎。賣之賜牟登。都宮者。高所知武等。神長柄。所念奈戸二。天地毛。縁而有許曾。盤走。淡海之國之。衣手能。田上山之。眞木佐久。檜乃嬬手乎。物乃布能。八千氏河爾。玉藻成。浮倍流禮。其手取登。散和久御民毛。家忘。身毛多奈不知。鴨自物。水爾浮居而。吾作。日之御門爾。不知國依。巨勢道從。我國者。常世爾成牟。圖負留。神龜毛新代登。泉乃河爾。持越流。眞木乃都麻手乎。百不足。五十日太爾作。泝須良牟。伊蘇波久見者。神隨爾良之。

翁と鈴木重胤

敷田翁が終世を通じて、莫逆相許したのは、鈴木重胤と黒川春村であつた。翁がこの両人を相知るに至つたのは、文久二年幕命に依つて、和學講談所の教官となつて以來のことであつて、その交情の濃かなる、爾汝斷金も啻ならなかつたのであつた。

勿論この両人は翁より齡高く、學者としても、先輩であつた。翁は贄を執つて敎えを乞ふに至らなかつたが、師友として常に交り、益を受けた事も尠くなかつたのである。殊に鈴木の學殖識見には翁は頗る敬服したものゝ如くである。

これに就て、後年翁の直接語られたことを「なには草」（磯野秋渚氏著明治三十三年出版）に依つて、抜萃すると、

「近代の學者は、鈴木重胤だ。幕府の内命で、廢帝の故事を調べたから、勤王家に暗殺せられたといふは、全く平田派の中傷であつて、重胤のために寃である。重胤は自分と共に勤王の志厚く、中々左樣な幕命を受ける筈がなかつた。何故重胤は

平田派に憎まれたかといふに、最初此派の學を奉じた處、流石に識見ある男なれば、早くも山師の學問なることを看破して、後一切これを棄て、自立したから、同派はこの男を讐敵として、攻撃したのだ。暗殺の下手人も、大抵分つて居るらしい。どう思つても、重胤は惜しい人だ。」

と、以て如何に翁が生前鈴木に傾倒したかゞ分る。

鈴木重胤は、翁の推稱する如く、近代の國學者として、最も異彩ある一人であつた。彼の學殖の一班は「日本書記傳」に依つても想像されるが天壽を完ふしたならば、なほ幾多の有益な著述を殘したことであらう。重胤の死因には種々の說があるが、翁の云ふ如く同門の軋轢と見るが、最も至當な觀察であらう。

鈴木が難に遭ふや、翁は直に馳てその家に到り、故人の遺骸を治め、子息重兼の負傷を看護した。後事の整理にも力を竭したといふことである。翁の遺稿中「鈴木重胤一周忌追悼歌集」の一冊がある。元治元年八月故人の一周忌に門人故舊集合して「月前懷舊」の詠を試みたもので、翁を始め黑川春村、横山由清、加藤千浪、榊原民部、塙忠韶、木村正辭以下七十首が載せられてある。これまた當年翁の主催に成るものであらう。

翁と黑川春村眞賴父子

敷田翁と黑川春村との交際は前掲「なには草」の中に、また翁自身の談話がある。翁曰く

「次によく相往來したのは、黑川春村だ。春村が臨終の時、我手を握つて、宜しく後を賴むといつた。春村には、學問の後を嗣ぐべき子がなかつたから、門人中に選んで、今の眞賴を薦めて、學統を受けさせたのだ。今は眞賴も博士とかいつて威張つてゐるさうだが、故あつて此方から交際はしない」

敷田翁生前の話に依ると、黑川眞賴は、もとは上州の絹商人の手代であつたさうな。性來學問が好きで春村の弟子となり、遂にその後嗣となつて、後年大學教授ともなり、文學博士にも推薦された。而もその黑川家を嗣いだのは、全く敷田翁の推挽であつて、眞賴にとつては、翁は唯一の恩人であつたのである。後、絕交の體となつたのは、どういふ理由に依るか。何等か深い仔細があつたものと見える。

翁と栗田寛其他

敷田翁と同時代の學者として、翁が最も推稱したのは、水戸の國學者栗田寛であつた。栗田も亦翁と同樣、頗る考證に秀でた學者であつた。彼の代表的著述たる「新撰性氏錄考證」「風土記逸文考證」の如き、これを證して餘りある。その短篇雜錄を編輯した「栗里先生雜著」の如き、また全文考證の文字といつてよい。

夙に伴信友の學風を慕ひ、古典の考證を以て生命とした敷田翁が、栗田寛を推稱したのは、所謂同氣相求むるものであつて、靈犀一點相通ずるものがあつたからである。又同時代に於ける國學の考證に於ては、翁と栗田は眞に東西兩大關の觀があるのである。

翁が後輩として、その前途を囑目したのは、小田清雄（すがを）であつた。不幸にして清雄は翁に先立つて早世し、その大成を見るに至らなかつたのは、遺憾であつた。

その他翁の江戸時代の交友としては、木村正辭がある。正辭は萬葉集の研究に於て、契沖以後の第一人者であつた。その著述は僅に「萬葉集美夫君志」四卷丈が上梓されて、多くは未刊行のまゝであるが、その造詣は眞に測るべからざるものがあつたのである。翁は正辭とも日夕相往來し、學問上にも會得するところがあつたらしい。

翁と尊王攘夷

敷田翁が幕末尊王攘夷の運動の渦中に投じ、當時の志士と交りを結んだことは、前に述べた如くである。翁の勤王論は、他の國學者と同樣、古典の研究に、その因を發して居る。眞淵、宣長以來、古典の研究が益々旺になり、我國上代の文物制度の探討と共に、萬國に比類なき我國體の精華も、漸次闡明さるゝに至つた。

而して其結果は、上下一般に勤王思想の普及となり、幕末に於ては、尊王論は、攘夷論と結び附いて、茲に大政維新の原動力となつたこと、歷史の明示する如くである。

敷田翁も尊王論者であると共に、攘夷論者であつた。その「百園雜纂」中の長歌の部に輯錄した「文久の末の年よめる發憤歌」等を讀めば、翁が如何に攘夷の觀念の熾烈であつたかが分る。それと同時に當時の所謂外夷に迎合する幕府當局を、如何に慊らず思つたことであらう。

翁の櫻田義擧を詠んだ歌に次の如きものがある。

した濁る井伊のたふれば、いかさまに、思ひけめかも、横狀に心ほびこり、ま

め人を、にくまひぬれや、彌生の、生日をほくと、大江戸の、御城にのぼるを
衣手を、常陸の國、玉くしげ、水戸の武雄が、いさをしき、友がき集へ、櫻田
に、切りて屠れり、そこをし、人もうれしみ、玉ちはふ神もさこそは、幸ひま
しゝか

また以て、翁の勤王思想の一班を窺ふべきである。尙翁の我國體に對する觀念の概要は、慶應四年四月起草して、志士の間に配布した「明々論」一篇によつて明かである。

翁の閑居讀書

敷田翁が所謂山中無暦日の境涯にあつて、心ゆくまで讀書著述の樂みに耽られたのは、明治初年河内國門眞在に隱栖された間の十年であつた。

翁の隱栖地は、四番村といふところで、生駒の山裾に續く平野の中にあつた。その居は、環堵蕭然、最も讀書に適したとのことである。一代の國學者も、草深い田舍に閑居しては、別して訪ふ人もなく、草庵の柴扉は閉されたまゝであつた。

四番村は平山凡水、自然の眺めとして見るべきものはなかつたが、地は淀の大江に近く、春は堤上の芳草芊々として萌え、秋は一望の稻田穰々の實をつけた。山家の風景も亦捨て難いものがある。翁も春日清和の日など、一瓢を携へて淀の堤上を散策し、一日の春興を擅にされたことであらう。

「百園雜纂」長歌の部を繙くと、その中に山家讀書の樂みをうたつたものがある。蓋しこの四番村隱栖の十年間になつたものであらう。

山家讀書

足曳の、山片つきて、狛劍、わが世經ましと、黑木をら、祝ひほり立、吹き來つる、風をふせぐと、降來つる、雨を防ぐと、山萱は、刈て葺きたり、壁代にあみて懸たり、此庵を、廣みまひろみ、ひとり只、わが家をれど、訪ひ來つる友こそなけれ、朝宵に、讀みつる文は、まくらつく、妻より外に、誰か聞くべき

山居讀書

人とはぬむくらの庵は、嵐吹き時雨降る夜も、玉葛、絶ゆることなく讀む書の、

聲も絶えせず、今もきくこと

などを一誦すると、當年敷田翁の隱遁生活のさまが、宛ら眼に見ゆるやうである。

翁の洒落と頑固

翁は學問の研究に沒頭する外、別段、これといふ趣味はなかつた。唯家畜殊に猫が好きで、常に一二匹は家に飼つて居たらしい。犬も愛したと見えて、之に關する歌も「百園雜纂」中にある。圍碁は所謂下手の横好きで、人さへ見れば相手にしたが、何時でも負けて許り居た。門下角氏の話に依れば、碁は翁よりも夫人の方が、餘程強く、夫婦差向ひで對局すると、極つて翁が負けるので、その都度御機嫌が惡かつたさうである。

翁は概して謹嚴な性格であつたが、また一面には、頗る洒脫なところもあつた。學者に通有な型の木念仁ではなく、風流韻事も解して居たやうである。左の一首の如き隨分思ひ切つて、露骨な表現をした歌であるが、また其間に翁の洒脫な風格が伺はれる。

門眞の奇事

几河内、門眞の里に、え男と名におふ人は、よろし女を、よめに娶らし、たらし日の、今日の生日と、網島の、鮒屋にむかへ、祝言も、事をへぬれば、閨のうちに、二人入りをり、くなかひも、いまだ果てぬに、軒端より、飛て來るらむ、くま蜂に、ふぐりさゝれぬ、いすゝきて、あなやとこそは、立をとりたれ

而もまた翁は一面には頗る頑固で、容易に人の云ふことを聞かなかつた。翁が神宮皇學館に敎頭をして居る時も、その頑固は有名なもので、當時學生の間に

敷田頭をたゝいて見れば　博學頑固の音がする

といふ歌が流行つたものである。

翁と酒牛肉

敷田翁は性來酒好きであつた。若い時には、斗酒なほ辭せぬ酒豪であつたらしい。由來國學者歌人には、酒味を解する者が多い。手近い所で大阪に因緣ある萩原廣道、大隈言道

なども、殊の外酒好きであつた。加納諸平の實父夏目甕麿の如きは、池田の中村良臣のところで御馳走になり、爛醉して附近を歩き廻り、昆陽の池に落ちて死んだ位である。

翁はそれ程酒に浸る方ではなかつたが、壺中の味はひを解して、晩年に至るまで、晩酌の一二合は缺かさなかつた。翁の歌集にも、酒の詠が多い。左に其一二を抄録する。

小名彦、神の命か、作らし、物は多けど、酒こそは、くしのかみなれ、はる花を、眺めつゝのみ、秋のはを、忍びつゝ飲み・照る日には、暑さを忘れ、寒る日は、寒さも知らず、貧しきも、飲めばいとはず、老らくも、飲めば思はず、夢の間も、飲までは たへじ、くしのかみあはれ

おなじく

辛酒と、名にこそおへれ、から酒を、飲まではたへじ、飯箱に、飯はあらねど、袋には、物はあらねど、のまく欲り、わがほる酒を家人よ、今日ゆるさね、かりてなければ

敷田翁はまた決して、牛肉の如きものを口にしなかつた。翁の考では、牛は田作りの獸であつて、その皮を剝いで、肉を喰ふが如きは夷人のすることと思つて居たらしい。

翁の詠に

牛肉

ゑとりらと、おやしたくひか、人皆を、見ればきたなし、牛の肉は、くらはぬ物と、神代より、いさめてあるを、世の中は、すべなきものか、にこ物の、鳥さへあるを、鰭物の、魚さへあるを、田人らか、力助くと、腹はゝし、田かへす牛を、生け剝に、はきてくらへる、ゑとりらか友

とあるは、その眞情を吐露したものであらう。

洋服着用者入門無用

武津八千穗氏の談に「或る時私に二三の神官が敷田翁のところへ弟子入りしたいと賴んで來たので、その旨翁に取次ぐと、翁曰く「承知しました。然しその人は、洋服を着たり、牛の肉を喰つたりする人ではありますまいな」と。念を押されてたので、私は「いや中々そんなことは致しません」といふと「それなら宜しい」と引受けて吳れられたと。敷田翁の面目躍如たるものがある。

翁の交友門下

大阪在住以來の敷田翁は、多くは門を閉ぢて、訪客を絶ち、一意專念讀書著述に耽つた

ので、その交友も多くはなかつた。渡 忠秋、藤澤南岳、滋岡功長などが、先づ翁の親炙した交友と目すべきである。堂島の歌人室谷賀親の邸へは屢々往來したと見えて現に室谷家には、翁の遺墨や書牘類が多く殘つて居る。賀親は翁を師友として尊敬し、萬葉集其他の講義を聽いた。賀親が死んだ時、翁は左の弔歌を詠んで居る。

　思ひきや君を今年はなき靈の數にくはへて祭るべしとは

翁の門下としては、西村捨三、四田修庵、滋岡長養從長父子、近藤尺天、本庄靜愛、角正方、武津八千穗、野口守敏、渡邊賫政、馬場幸治、龜島三千丸、寺井種臣、高宮正路庄太郎父子、大矢弓吾の諸氏がある。この中角正方氏は、翁の最も愛した門弟で、翁の死後その遺著手稿の全部は、未亡人より擧げて角氏にその保管を託されたのであつた。

尙玆に特筆して置きたいことは、大阪の特志家小林利恭、椿本庄助、辰馬圭助諸氏が、始終翁の後援者として種々面倒を見、翁をして衣食薪炭の憂なく、書を讀み學を講ぜしめたことである。殊に翁が晩年門眞の隱栖を引拂つて大阪に移り、堀江に居を構ゐて、帷を垂れ業を授くるに至つたのは、小林利恭利昌父子の熱心なる後援に外ならぬ。

由來、大阪の町人には、天下の學者を招聘して、之を優遇し、文運の興隆に資せしむるの美風があつた。鈴門名譽の一人たる村田春門を大阪へ迎へたのは、米屋平右衛門即ち殿村茂濟であつた。中島廣足を長崎より迎へたのも亦當時の惣年寄中村左近衛門(元道)であつた。前記諸氏の敷田翁に於ける亦同樣であつたのである。

殊に翁の著「日本記標註」「祝詞辨蒙」を上梓するに就ては、諸氏は尠からず盡力した。諸氏の盡力微かりせば、「日本紀標註」「祝詞辨蒙」は今日まで出版されなかつたかも知れぬ。この點亦甞て佐々木春夫が資を給して、萩原廣道の「源氏物語新釋」を世に出したると、甚だ相似て居る。盖しこれ等の人々の厚意に對しては、翁もまた感謝したことであらう。

翁活字本を嫌ふ

敷田翁はその著書を洋紙で活版刷にすることを肯んじなかつた。小林利恭氏等が「日本紀標註」を上梓するとき、出版費の都合上、洋紙の本にしようとしたが、國典の著述を夷のつくつた紙ですることは以ての外だといつてどうしても承知せぬので、遂々あんな和裝の本にしたのであつた。

本庄幸四郎の事

敷田翁の門下中博覧強記濟輩を抽ん出たものは、本庄幸四郎(中臣靜愛とも云ひ榊廼舍と號す)であつた。

この人は明治十二三年頃から翁に就て、國學を學んだが、隨分の奇人で、一生不犯を以て押通し、禪僧以上に戒律が嚴重で、なまぐさものは、一切口にしなかつた。舊弊なことも敷田翁以上で、終生結髪であつた。記臆のよいことは前後無比で、敷田翁すら、本庄のことを稗田阿禮の再生だといつて、褒めて居た位である。この人が本を讀み出すと、二晩でも三晩でも夜通しするが、その代りまた寢るとなると、三日位飮まず喰はずに寢たものである。世間的の名聞を嫌ふこと蛇蝎の如く、腹笥萬卷を藏しながら、一の著述も殘さずに死んだ。敷田翁は例の頑固癖から、何でもないことで、彼を破門したことである。

翁の臨終

敷田翁は若い時から、苦學力行、具さに螢雪の苦を積んで、あれだけの學者となられた人だけに、學問の研究には頗る熱心で、晩年死期の近づくまで一日と雖も讀書を廢されなかつた。常に人に語つて「私は本を讀むのが何よりの樂みぢや、今でも寢るのは夜分二刻（四時間）で充分である」といはれたさうである。

敷田翁の著書手稿の全部は、現在豊國神社社司角正方氏が保管して居るが、大小數百部の書冊は悉く版下にしてよい位、細字を以て刻明に淨書され、殊に「萬葉集畧解正僞」の如き、翁最後の著述で、八十餘歳になつて稿を起したものであるが、蠅頭の細字、壯年の我等にして猶且讀み難きを覺える。翁の精力根氣、亦以て知るべきである。

敷田翁は八十を過ぎても頗る頑健で、一日の講莚も缺かさず、時に依ると日に七八度も講義をした。これがために氣根を疲らしたものか、身體の自由が利かなくなり、舌がもつれて、言葉が分りにくゝなつた。それで死ぬる前二三年間は一切讀書を廢して靜養して居たが、遂に明治卅五年一月八十六の高齡で、眠むるが如く大往生を遂げた。

而して葬儀は門弟知己に依りいと懇ろに營まれ、西村捨三翁祭主、近藤尺天翁副祭主として、神式を以て執行し、遺骸は、阿倍野墓地に埋葬した。左に掲ぐるものは、その門人等の筆に成る碑文である。

敷田年治先生碑文

津國阿倍野廼原に葬(ハフ)り奉禮(マツ)る吾師敷田年治大人は豊國(トヨクニ)の宇佐縣(ウサノアガタ)敷田ノ里に坐(マシ)ませる二葉山神社の祠官宮本包繼主の眞名子(ナナゴ)にして文化十四年七月廿日に生れ給ひ幼名を主計之介と申し天保十年二月三日仝縣四日市町の蛭兒神社の祠官となり弘化三年閏五月廿九日從五位下に叙てられ敷田年治と改め給ひ文久三年二月二日東都に出立し和學所の教官となり明治元年七月廿日浪花に移り國學教習所の學士となり仝二年八月十

日佐土原の藩主島津忠寛侯の召の隨意仕へ奉り仝四年十一月十五日凡河内茨田縣門眞里に移り仝十四年九月一日伊勢神宮の祭主久邇宮朝彦親王の御言畏み皇學館の敎頭となり久邇宮岩麿王の侍讀を兼ね給ひしこと三年余りにして門眞里に歸り亦浪花に住み給ひぬ若くおはしゝより智深く才々しく專ら學の業に努め勤しみ給へれ婆皇學は更にもいはす漢學に至るまで曲々に問ひ明らめ其奥秘を極め給ひ著はしませる書籍は國典字徵をはしめ三百卷許りにも數積りて今は天下に双なき道の博士と人皆の仰き奉り稱へ奉りしをいかなる枉事にか有けむ今年一月卅日御齡八十有六にして泡雪の消ぬるか如く現世を去給ひしは甚も悲しく惜支業にもありける故その所由をしるし大人か奥津城を築き香はしき御名を後之世に傳へおきなは神靈を悅はしこの石か根に裏安く鎭まり給ふらむと思ひ設けたる石碑にな舞

明治三十五年五月　門人等謹て申す

敷田翁の一生

思へば敷田翁は、學者としては、世間的に好運ではなかつた。若し翁にして、終始東京にあらば、大學敎授ともなり、文學博士にも推薦されたであらう。早く關西に下つた爲めに、國學者として異常の天質を抱き乍ら、多く世に知らるゝなくして逝いた。この點は我等の翁のために悲しむ所であるが、而も翁にして見れば却つて世の煩累を避けて一身を讀書著述に傾注し得たのを、學者の本分として滿足するであらう。學者の事業は、政治家實業家の如く華やかでなく、地味であるが、而も其生命價値は悠久である。翁等身の著述の天地間に存する間は、學者としての翁の名は不朽である。翁以て瞑すべきである。

歿後の門人西村捨三

元大阪府知事西村捨三翁は、敷田翁歿後の門人であつた。翁の葬儀の際その祭主に推された關係上、翁の棺前に於て、入門の式を行つたのである。歿後の門人といふことは、その例に乏しくない。平田篤胤も伊勢に赴き本居宣長の墓前で入門の式を行つたのであつた。

敷田年治先生著書目錄

この著書目錄は、大正十二年五月、角正方氏が編纂されたるものにして、敷田翁の著述全部を收錄せるものなり。學者並に好書家の參考となるべきを思ひ、角氏に乞ふて其許諾を得茲に附載することゝ爲せり。

喪明録　嘉永六年十月著　一冊

愛兒の病死せられし悲みを四十九日のとふらひはて〻後かきしるし給ひし喪子追悼の記事にして喪明録とは禮記ノ檀弓に子夏喪其子而喪其明とあるによれるよしかきしるせり

假名沿革　文久元年九月著　二冊

用體言の假名のうち「くものい」已下九十二言の沿革を考證せしものなり

宇佐宮雜徵　文久三年正月著　一冊

宇佐八幡宮御鎭坐のことゞもを諸書によりて考證せしものなり

鈴木重胤一周忌追悼歌集　元治元年八月　一冊

鈴木重胤翁遭難後一周忌に門人故舊の集合して月前懷舊を通題にして詠まれし長短歌を書記されしものなりおもふに此追悼會は故師の主催にて當時參會者黒河春村、横山由清、塙忠韶、加藤千濱、榊原民部、木村正辭外七十首の歌を載せたり

明々論　慶應四年四月著　一冊

我國體の萬國に比類なきこと君臣の情義の信實なることを書記し當時勤王の浪士に配布せし草稿なり本書は四月廿八日の夜とみに書記されしこと附記に見えたり

荒海日記　慶應四年七月著　一冊

慶應四年大江戸のさわきを逃れて浪華に移り給ひし時の船路の日記なり

班田考　明治六年長月著　一冊

本邦班田の由來沿革を考證せしものなり

得度考　明治七年三月著　一冊

僧侶の度牒及ひ佛法僧のことを考證せしものなり

禮儀畧　明治七年十月著　一冊

我國上古より禮典の重きこと降りて人世となりて人と人との間に於ても禮儀の忽にすべからさることを書記されしものなり

蒙古來襲徵　明治九年極月著　一冊

龜山天皇の文永四年蒙古來襲を東國通鑑に據り抄錄記載されしものなり

戸籍雜徵　明治十一年十月著　一冊

戸籍の起源沿革を記されしものなり

神の伊吹　明治十一年極月著　二冊

我國神威の尊く長きことを凡そ歷代編年順に書記されし隨筆なり

大祓詞私考　明治十五年四月著　一冊

延喜式大祓詞を注釋し冒頭に大祓てふものの起源沿革を記されしものなり

修德說　明治十三年六月著　一冊

德の字の音訓字義につき考證說明せしものなり久邇宮御殿に於て修德てふ題名の下に講演せられし草稿なるべし

學の手附　明治十二年七月著　一冊

學問の主義及學ひの順序等を記されしものなり

神境紀談拔萃　明治十四年冬著　一冊

元祿十三年に神宮權禰宜渡會神主延貞の編輯せし神境紀談を抄錄せしものなり

宮人考　明治十七年五月著　一冊

宮人なる女官の名義を考證せしものなり

阿房我多理　明治廿年六月著　一冊

河内國北部の風俗を記したるものなり

風土記考　一冊

諸國風土記の起源及び三風土記諸國風土記殘篇等に付き考證されしものなり

郡名私考　一冊

諸國郡名の考證なるも山城大和両國のみにして未完のものなり

佚史　四冊

古風土記、古書、書目七十四餘種を引證し國史の闕如を補ひたるものなり

萬葉集畧解正僞　一冊

萬葉集の解注なるも巻一のなかばにして病氣の爲め筆をとゞめられし先師最終著述の殘欽なり

姓氏錄證注　一册

新撰姓氏錄の考證なるも初巻一册にして本書は元全稿なりしにいつしか散逸して殘缺となれるは惜むべし

西籍新論　二册

漢籍に據り聖人君子と稱する文武、周公、孔子等の行狀、敎化につきて考證批評せし隨筆なり

國字考　一册

我國上代の文字ありしことを考證せしものなり

老之酢鉒　一册

國語のうちにて難字難訓を五十音に次第して諸書を引用解釋せしものにして七八册もあるべきを散逸せしか殘缺本として漸く一册を保存す

新釋源氏物語　帚木巻　一册

源氏物語を讀みよき樣に熟字にかへて解釋せしものなれ共一巻よりなきは惜むべし

杵築大社神名考證　一册

出雲大社の祭神名を諸書に據り證左をあげて考證せしものなり

屠兒徵　一册

屠兒(餌取)を考證せしものなり

諸國國造考　一册

國造の起源沿革を考證し諸國國造の內山城國造を始め廿餘國造を考證せしものなるも殘缺にて完本にあらず

音韻啓蒙　明治七年五月刊行　二册

音韻につき反切、轉音、拗音、異音、略音、等十八條を考證明せられしものなり

古事記標註　明治十一年四月刊行　七册

本居宣長古事記傳の大部なるを厭ひて簡略に見安き考へもて標註解釋せしものなり

官故　明治十二年九月刊行　一册

神祇官の起原沿革官制所在地等を考證せしものなり

標註播磨風土記　明治廿年八月刊行　二冊

播磨風土記に假名を附して標註解釋せしものなり

日本紀標註　明治廿六年十二月刊行　廿六冊

日本書紀を註釋せられしものなり

古葬徵　明治三十年七月刊行　一冊

我國葬儀の沿革由來を考證せしものなり

祝詞辨蒙　明治廿八年六月刊行　五冊

延喜式祝詞を註解せしものなり

中臣宮處氏本系帳考證　明治廿八年十二月刊行　二冊

中臣宮處氏本系帳の考證なり

百園雜纂　明治三十二年刊行　五冊

長歌、短歌、祝詞、文章を次第類別したる家集なり

國典字徵　五十五冊

本書は類聚名義抄を初め本邦の字書二十餘部の外に國史、物語、歌集、本草、漢籍に至る迄諸書を引用し書引となして其文字の訓義を考證したる字書にして百餘冊編輯されしに慶應四年江戸より浪花に移轉の節船中にて潮水に浸潤せし爲めに遂に幾十册か腐敗し現在五十餘册のみ殘れるはいと惜むへきことなり

職令明鑑　二冊

職原抄、令義解の索引なり

皇族類纂　一冊

皇胤紹運錄の索引なり

職解便覽　一冊

職原抄述解の索引にして慶應四年江戸より浪華に移居のとき海路船中にて徒然の餘り抄錄せしこと序文に見せたり

畿內志便覽　二冊

五畿內志の索引なり

紀外神名徴　二册
日本書紀、古事記以外の諸書に見えたる神名を五十音に次第抄出したる一種の神名字彙と見るべき索引なり

諸國雜纂　六册
諸國の地名及地名に關係ある人名を諸書に據り抄錄し國別に類聚したる索引なり

國史姓名錄　十五册
六國史及ひ諸書の中より人名を抄出し五十音により次第したる索引なり

式抄地名便覽　四册
延喜式、和名抄の中より地名のみを抄出し五十音によりて次第したる索引なり

氏族類纂　一册
尊卑分脈其他諸家系譜より抄出したる氏姓を五十音に次第したる索引なり

百園語彙　二十二册
國史、物語、歌集、本草、雜書等六百餘部の中より言語を抄錄し五十音に次第したる索引なり

百園雜錄　七十五册
仝上書目のうちより雜事に關することを抄錄し例の五十音に次第したる索引なり

大系圖畧引　一册
大系圖記載の人名索引なり

西籍雜纂　四十一册
廿一史及經書等引用書目八十餘部の中より人名、地名、言語、雜事等を抄錄し五十音に次第したる漢籍の索引なり

類字便覽　二十一册
仝上引用書目のうち文字を類別し五十音に次第したる索引なり

已上刊行本の外、稿本、索引等は總而敷田先生自筆原稿本なり

刊行本五十一册

自筆原稿本索引二百八十二冊
合計參百參拾參冊

脫漏

玉乃由久閇　明治　年　月刊行　一冊
靈魂不死のことを論したる隨筆なり

敷田年治翁歌集補遺

この長歌は、翁一生の作歌中の最も力作にして、渾身の心血を濺げるものなるも、故ありて「百園雜纂」長歌の部に遺脫せるを以て、本書刊行を機として、茲に載錄することゝ爲しつ。

ふること歌　故事歌也

葦原の、水穗の國、秋津島、是の大和ハ、天地の、なしの隨意、神習ふ、みちをたふとみ、千萬の、本つ御國と、語繼、言繼來たり、いは卷は、ゆゝしくもあるか、國土の、はしめの時ハ、天そゝる、山さへ立す、みなきらふ、河さへゆかす、大海に、雲たちきらし、聲もなく、香もなき中ゆ、葦牙の、もえてあかりて、鏡成、かゝ利坐しを、天津日と、あかまへまゝり、天に坐、神のもろ〳〵、神なから、御靈うつさひ、樛木の、繼のよろしく、世の中を、守り坐とへ、みむすひの、神の命の、畏くも、おほしめさく、浪雲の、五百重か底に、國土を、い作りなせと、大御言、よさし給はし、皇みおや、二大神、大御言、かゝ布理坐て、大御手に、ぬほこ攜へ、海原を、いかにさくれ婆、呉羽とり、綾しくもあるか、一島を、いかきえ給ひ、しか島に、御天降たゝし、左より、い行めくらひ、右より、いゆきめくらひ、たふとくも、言揚すらく、え少女に、あはあへるかも、え乎とこに、あはあへるかも、あか身には、な利餘るあり、汝か身には、なりあはぬあり、あはぬをら、ふさきてましと、まくはしく、語らひかはし、百八十の、國をうみ坐し、百八十の、神を

生まし、火結ひの、あれ坐時に、み陰をら、燒れ坐けむ、神あかり、あかり給へれ、うつ
くしき、なにもの命、現世の、事もとはさす、岩隱り、かくり坐れ婆、せむすへの、たと
きをしらに。水鳥の、立居なけかひ、きたなきや、よみの國邊に、ゆくりなく、あは來に
けりと、み帶をら、解てなけうて、御衣をら、とりて投うて、馬の爪、筑紫に至り、橘の、
小戸の浪間に、大みくし、かつきそ々かし、三柱の、み子生坐れ、たゝはしく、おもほ
しめせか、御言揚、申給はく、み子多に、あは生うみて、いやはてに、うつのみ子乎ら、
ふさはしく、あはうみえたり、天照す、日の大神は、天津日に、御靈さへしめ、天つ空、
てらしめくらせ、月讀の、神のみことは、奴羽玉の、夜の食國を、平けく、守り給はね、
素さのをの、神の命は、天下、事とりふさね、まつふさに、仕奉れと、事依し、定坐しを、
八束髯、生たるゝまて、青山も、ひたなきからし、足ちし、み母の國、しゝくしろ、黄泉
の堺に、獨たゝ、降り坐しゝを、又更に、おもほしけらく、はしき耶し、なねの命に、こ
と申、別れてましと、久方の、天をとよもし、荒金の、地ふみゆすり、はる〳〵に、登り
來坐を、そこをし聞のかしこみ、美ゝ豆らに、みくしまかしめ、大御手に、玉卷もたし、
五百の里の、靭とりおはし、みとらしの、弓腹ふりたて、堅庭乎、くゑはらゝかし、雄々

しくも、たけひ給はく、何すとか、此所に來つらむ、行水の、はやかへりねと、御怒の、
いよゝすゝむを、みいろとの、答へ申さく、あか心、けしくはあらす、赤羅引、赤き心乎、
みうけひに、あらはさましと、みゝつらの、玉乞わたり、眞ぬな井に、いふりすゝかし、
其玉を、さかみに碎き、吹うつる、息吹の霧に、五柱、み子の命、すき〳〵に、あれ出ま
せれ、み子の名の、勝のすさひに、作らしゝ、み田に馬ふせ、ふち馬を、いけて皮はき、
天津罪、犯し坐しを、見かしこみ、驚かしけむ、岩やとを、さし籠らせり、かゝれこそ、
常夜行とへ、螢なす、かゝやく神、さはへ成、さわき音なひ、夜晝の、わかちしらねや、
庭津鳥、かけをなかしめ、思ひかね、たはかる神し、神はかり、思ひはかりて、香山の、
榊こちとり、ほつえらに、眞玉とりつけ、中つえに、鏡とりかけ、下枝らに、和幣とりし
て、眞男鹿の、肩骨うつぬき、くすしくも、卜とふはしに、鈿女とふ、面勝神し、神かゝ
り、かゝれるもころ、むなちをら、いかき顯はし、裳紐をら、おしたらせれハ、千萬の、
神相集ひ、神ゑらき、ゑらき聞こして、あやしとや、おもほしぬらむ、石やとゆ、見そな
はすとに、石戸別、神の命、大御手を、いたゞきとらし、外つ方に、出坐しめつ、かくし
社、大み光ハ、天地に、いてりわたれゝ、すさのをの、神の命ハ、御心を、いため坐けむ、

罪こそハ、のからへまさね、み髯切、み爪ぬかしめ、神やらひ、やらひ給ひぬ、雨ましり、風すさふ日を、風ましり、雨そゝく日を、きた給はむ、笠しなけれや、きたまはむ、簑しなけれや、山萱を、み身によそひ、やゝ〳〵に、出坐道に、雨やとり、乞し給へと、うけひける、人しなけれや、八雲さす、いつもの國、鳥上の、嶽に降らし、火の川の、水行みれ婆、箸こそハ、流れ來にけれ、水上に、人や住むらむ、河登り、のほり坐れは、さしやかむ、をやのしき屋に、老らくの、めを立ならひ、うつくしき、愛の少女を、三栗の、中にすゑおきて、かひなて、脚とりなて、まかなしく、なかすとはせは、梓弓、八人の兒らを、梓弓、八俣をろちか、年毎に、來てを呑けり、殘りつる、是の少女も、のからへむ、由のなけき婆、打むせひ、ねにハ泣けれ、そこをし、語るをきこし、辛酒を、やはらにかみなめ、出きつる、時またすれは、ほのくらく、雲かきみたし、丘上より、もこよひ來たり、尾ろみれば、八俣ニわかれ、かしらさへ、八俣にわかれ、わかれつる、頭もろ〳〵、酒のまし、ゑへるを時と、立むかひ、切てはふれは、中の尾ゆ、聞のかしこき、村雲の、つるきのたちを、あやしくも、取出ましぬ、是そ此、うつの寶と、大神に、さゝけまつりぬ、はしきやし、愛の少女を、眞髮ふる、くし稲田姫と、よろしくも、名にかゝしめ、しほ舟の、ならひいませり、うみましゝ、み子ハおほけと、大汝むち、神の命は、あし原の、水穗の國を、平けく、治め給ふと、風の音の、遠音にきこし、神なから、宣らし給はく、千五百秋の、水穗の國ハ、あかみ子の、しらさむ國と、國玉の、神の其子に、眞鹿子弓、はゝ矢たまはし、國む計に、出たゝしゝを、大汝むち、神のみいつに、行鳥の、爭ひかねて、かへりこと、申さゝりけり、久方の、天の河原に、八百萬、神あひ集ひ、神はかり、議り定めて、さしふつの、神の命、みかふつの、神の命に、大御言、くたし給へり、玉くしけ、二大神豊、千早振、神をやはしめ、天下、ことむけぬれや、妻苅の、劒の太刀、八坂瓊の、みすまるの玉、八咫かゝみ、是の三種を、天照す、日の大御神、大御手に、とらし給はし、大御言、のらし給はく、あを見まく、ほりする時ハ、御鏡に、向ひたまはね、みあらかを、共にすへしと、菅の根の、ねもころ〳〵に、事をしへ、みたし給へり、高光、日の大み子ハ、友のをの、八十友の緒を、みをさきに、ひきゐつらなへ、天雲を、千別に千別、高千穗の、二上の峰に、かしこくも、あもり坐けむ、ひたをから、國まきとほり、隼人の、吾田の長屋は、朝日の、直刺國、夕日の、日かける國、山川も、よりて仕ふと、宮柱、太しく立、彌高に、御代知坐り、しろしをす、笠沙の崎に、さかしめの、ありときかして、出立

し、言のりかはし、一夜唯、あたはし坐しを、皇子をこそ、はらみ給へれ、そこをし、あ
やしみ坐を、くわしめの、いかにおもへか、うつ室の、中に入たち、しか室を、やかしめ
つれは、もゆる火の、ほのほの中ゆ、三柱の、み子あれ坐せり、みいろせと、み弟のみ子
と、足引の、山にわけ入、和たつみの、海におりたち、さつ矢とり、釣たるゝとに、針を
こそ、うしなはしけめ、弟み子の、さまよひ坐を、塩筒の、乎ちの語らく、わたつみの、
五百重か底に、綿津見の、宮はありとへ、しか宮に、い行ませねと、ねもころに、告るき
こして、堅間もよ、まなしかたまに、ひとり只、乗らし給へり、朝はふる、風のまに〳〵、
夕はふる、浪の隨意、沖津鳥、かもつく島に、つゝみなく、渡りたてたり、波のよる、磯
によりたち、白雪の、ふり放みれ婆、わたつみの、神の宮居は、あはひ玉、眞玉しきなへ、
くかねをら、いらかにふけり、白金の、御門の前に、湯津かつら、しみたつ蔭に、湧出る、
清水結はし、み心を、すまして坐は、咲花の、匂へる子らか、にしき綾の、袂ふりはへ、
出向ひ、めをくはせけむ、大殿に、ひきゐかへらひ、絹疊、八重敷かさね、しか上に、い
ませまつらひ、墨染の、夕さりくれハ、むしふすま、にこやかしたに、眞玉手の、玉手さ
しまき、もゝ長に、いをし坐しゝを、あら玉の、年か經ぬらん、ふる郷を、しぬはすきか

し、わたつみの、神の命か、出坐の、事まちとはし、綿積の、沖つ宮居に、うろくつを、
集へとはせは、みなそこふ、赤女か口に、針こそハ、ふゝみたりけれ、しか針を、とりて
奉りて、夜光、愛の寶と、あやしきや、汐ひる玉、奇しきや、汐みつ玉、たまくしけ、ふ
たつの玉を、ゆら〳〵に、捧けまつれゝ、大宮に、かへらせ來坐、うるけちの、おほちと
名つけ、つりはりを、かへし給ふを、邊津浪、そこをきこさす、たし〳〵に、攻來るはし
に、汐みつに、投うてませれ、いか汐の、いかしく來より、高山に、にけてのほれは、高
山に、汐立登り、せむすへの、たときをしらに、みいろせの、乞祈けらく、汝ませる、み
垣はなれす、犬人と、吾はつかへむ、子孫の、八十つき經とも、わさをきの、民ならまし
と、かたらかに、うけひ立たり、綿積の、神の少女は、み子うまむ、月待とらし、はる〳〵
に、渡り來坐を、み産やも、またたゝぬとに、み子さへも、あれ出坐り、うつくしき、妹の
命や、いかさまに、おもほしめせか、み子をさへ、ひたし奉らす、海阪を、とちていませ
り、いれは彥、神のみことは、薦枕、高千穗の宮に、あらはにの、事聞こしをし、大み言、
のらし給はく、東の、國の盡、味村の、さわきおとなひ、かりこもの、亂りにけりと、風
のとの、遠音にきかし、千萬の、軍とゝのへ、早吸の、鳴音を渡り、梓弓、引豊國ゆ、仇

守、つくしをすき、朝もよし、吉備に出たち、海よりは、船乗つゝけ、陸よりハ、馬のりつゝけ、あしかちる、難波にいまし、大和へに、い向ひませは、百不足、八十建等か、大君を、神とも知らに、なめしくも、仇み奉れり、戰ひの、軍の庭に、なくるさの、流れ來にけむ、美いろせの、御袖にふきぬ、そこをし、うれたみ坐て、くれたふれ、えみしかために、玉きはる、命しぬへし、おれ奴いけてはおかしと、血沼の海に、御手をすゝかし、男の里に、をたけひまして、岩くえの、あれはく耶しと、もみち葉の、過坐にけり、かしこきや、わか大君は、天津日の、み子にしませ婆、天津日に、伊向ひ坐は、天地の、道に違ふと、いてましの、道をめくらひ、日の御影、背におひもたし、東ゆ、たゝかはましと、紀のうみに、み船うけするゑ、荒浪に、漕たみゆけ婆、沖つ風、い吹まとはし、おきつ浪、雲にあふれり、みはらから、二人の皇子ハ、つるきたち、たかみとりしはり、さきたてる、浪をふまして、常世へに、出たゝしたり、しかれこそ、風ハ音せす、さわけりし、浪はなこめれ、大み船、はてぬる方ゆ、み軍を、あともひたゝし、三熊野の、石根さくゝみ、山深く、わけ入にしに、あら熊か、いふかす息に、千萬の、人はおえたり、いはまくは、ゆゝしきかも、天照、日の大神、宇陀人に、告のよろしく、みつるきを、授け給へり、しか

つるき、戴きもたし、大前に、捧け奉れは、み心は、さやにさめまし、み軍の、人も起いて、三芳野の、あら山中を、夕つゝの、かゆきかくゆき、立霧の、まとはしをるを、天津神、みそなはすらむ、八咫烏、みさきにたてり、空翔、あまたむ見つゝ、山を越、野を越ゆけは、山邊にハ、土蛛たかれ、里邊には、えみしいはめり、いさをしき、軍もろ〳〵、たむかへる、仇を亡し、巣を拂ひ、穴をうかたし、鞆のおとも、聞えすなりぬ、諸しこそ、御名はかゝせれ、玉襷、畝火の丘は、敷坐せる、國のまほらと、ことゝはし、議り給はし、葛城や、高天の山ゆ、石村に、五百綱とりかけ、ひこつらひ、いつきたてなめ、しげ山や、は山こち〳〵、おほ木こり、小木こりとらし、高知や、天のみ蔭、天しるや、日のみ蔭と、宮柱、ふとしりたて、常しへに、高知坐せり、此宮ゆ、六繼かはらひ、になのわた、黒田の宮に、天下、しらしめしけむ、天皇の、神の大み世に、ぬは珠の、一夜のからに、くすしきや、山はぬけ出、石盡と祉、天そゝりけれ、あやしきや、土はさけて、鳰の海と、水はたゝへり、長らふる、水垣の宮と、ふさはしく、名におふ御代は、掛まくは、ゆゝしかしこし、みしるしの、瑞の寶と、やさかにの、大み寶を、大殿に、ほかひまつらし、二種の、大み寶を、眞くはしく、なさへ作らし、神代より、傳へ坐けむ、三寶の、御稜威かし

こみ、十市のや、笠縫の里に、神籬を、作り仕へて、月艸の、うつし奉れり、倭姬、みこ
の命に、かむさねの、坐らん方に、大御幸、よさし給へは、大君の、み言のまにま、みひ
しろを、脊に負持たし、百不足、五十橿か本ゆ、木の國の、名草の宮に、新玉の、三年大
坐し、大三輪の、みむろの宮に、白浪の、かへらひ來まし、秋しぬの、宮にうつらし、沖
つもの、名張のみやゆ、呉はとり、あなほの宮、坪菫、つみえのみや、近つあふみ、日雲
の宮と、玉藻なす、かよりかくより、となみはる、坂田の宮に、玉くしけ、二年いまし、
別れては、いくらの宮、尾張の、中嶋の宮に、大御輿、しはしやすらひ、神風の、伊勢の
國を、國めくり、いて坐さきに、奴らか、むかへをろかみ、朝には、大御け奉り、夕には、
神み田まつり、おすひ、飯高の國、こもりくの、したひの國、白鳥の、眞野の國と、國の
名を、あらはし申、常世浪、敷浪よする、百船の、わたらひの國は、山川の、さやにめく
らひ、うまし國、名くはしき國、此國に、新みや造り、さく鈴の、五十鈴の宮と、かしこ
くも、負はせたまひ、常しへに、齋ひ奉りぬ、此の瑞宮、

明治十五年春　　　　　　　　敷田年治

敷田年治先生追悼歌（門人）

敷田大人に贈る長歌　　　　　　　　近藤同

稻むしろ、敷田の翁は、劒太刀、鞘ゆぬけいてゝ、利心を、いよゝ振おこし、車もて、運
ひし書を、まつふさに、讀み明らめて、棟まて、積むへき書を、ねもころに、書き著はし
て、功さへ、名さへ遂けぬれ、今よりは、安く靜けく、現身の、世を送らむと、押照や、
難波の小江の、葦蟹の、なまりてませと、かくれなき、跡をとめつゝ、慕ひよる、人こそ
たえね、御園生の、園の老木の、桃の下道、

敷田大人の身罷り給ひ葬りのわさ仕奉りて
後阿倍野の御墓にまゐりてよめる長歌　　　　角正方

よそに見し、阿倍野の原も、頃日は、見れハなつかし、吾戀ふる、君かいませは、わかし
のふ、君かいませは、よそにみし、阿倍野の原も、このころは、見れは悲しゑ、大人かい
ませは、

敷田大人の五十日祭によめる長歌　　角　正　方

菅根の、ねもころ〳〵に、思へりし、吾師の大人の、今も世に、いますときかは、雲離れ、國へなるとも、國さかり、雲へなるとも、鳴田鶴の、たつねもい行、まのあたり、語りてましを、まのあたり、まみえむものを、悔しかも、思へはくやし、過にけむ、春の初に、三日月の、影ならなくに、雲かくり、隱れますとへ、玉もひの、そこを忍へは、朝には、息つきあかし、夕には、入居歎かひ、せむすへの、手着もしらに、春鳥の、さまよひぬれハ、浪花江や、大江のきしに、あし蟹の、なまりてをりて、人のぬる、うまいもえせす、照月の、傾く見つゝ、在りし世を、吾はそ戀ふる、逢よしをなみ、

反　歌

八握髭かき撫つゝも師の大人か敎ふる影の目合にみゆ

寄梅懷舊といふ題にてよめる長歌　　角　正　方

梅見れは、吾はなつかし、しか花の、盛を見つゝ、師の大人か、まかりましけむ、そこもへは、梅はうるはし、梅こそは、吾師の大人の、記念なるらめ、

反　歌

咲梅の花を尋ねて桃山に御供つかへし折もありしを

鳥さへも心あるかなうくひすの鳴音も今朝は悲しかりけり

敷田翁の身まかられし時　　武津八千穗

學屋の　ともし火消えて　詫しくも　あはれめしひと　なれるをしへ子

手束杖　をれてつまつく　をしへ子を　よそになしても　ゆきし君かな

恩師敷田大人をいたみてよめる長歌　　宮崎年孝

稻むしろ、敷田の君、狛劍、我師の大人は、學柱、まなひの聖、玉鉾の、道の燈と、世こそり、稱へ奉りて、ちゝのみの、父とたのまひ、柞葉の、母としたひて、現身の、世の遠人と、萬代に、幸くいませと、天地に、祈りてあるを、言に擧けて、いへはゆゝしゑ、退るとは、家にものらす、ゆかすとは、人にも告けす、此頃の、空かきくもり、ふり來つる、雪ならなくに、衣手の、かへり來まさぬ、百不足、八十のくまてに、獨たゝ、出立せりと、

玉梓の、文しきつると、草枕、旅の宿に、家人の、告けて來れは、およつれか、人のいひける、あまのかる、目かもまとへる、うつゝかも、夢かも見ると、くもり夜の、まとひ息つき、雁金の、ねには泣けとも、公に、仕ふる我や、打思ふ、心もとけす、東の、空をあふかひ、十六自物、伊はひ拜み、しぬの目の、しぬはひ居らく、行水の、早き日數を、十日あまり、過しゝ今日や、大人かりを、弔ひ來れは、玉片間、阿倍野の原の、おくつきに、君はいませり、白妙に、よそひ奉れる、玉床に、大人は座せれと、常なりし、御言ものらす、思ふ空、きこえも得せす、一向に、うきこそまされ、つら〳〵に、思ひ奉れは、今年の、むつきの始、賀詞をし、聞え申すと、參來しは、あはれ此世の、別路と、今そしらるゝ、岩くえの、くやしくもあるか、かゝらんと、豫て知りせは、左右さらす、仕へんものを、今更に、甲斐しあらねは、たきちおつる、涙の雨に、そほちたる、袖しほりつゝ、玉床を、伏して拜み、おくつきに、まゐてぬかつき、行牛の、進むともなき、心もて、かへり見しつゝ、やゝ〳〵に、宿にかへりて、敷浪の、しきてしぬへは、ひつちにし、衣の袖は、かわくひまなし、

反歌

かゝらんと豫て知りせは玉鉾の道の行手に標ゆはましを

梅かをり鶯うたふ時にはあれと春の心を見れはしらしな

敷田翁學問の特色

敷田年治翁は、國學者として立たれたが、學は和漢に亘り、その蘊蓄を極め、就中最も考證に長じて居られた。從つて「國典字徵」をはじめ、種々の索引類を著はされた。この點は「廣文庫」や「群書索引」などを出された物集高見博士などゝ、そのゆき方が同じやうに思ふ。或ひは物集博士などの先をなされたものとも云ふことが出來る。何れにするも大阪の國學界掉尾の一人として、光輝を放つ人である。

（大阪府立圖書館長　今井貫一氏談）

本居宣長大人

敷田年治

葦原の、水穗の國は、言まくは、畏けれども、神習ふ、神の御國と、語りつき、言繼來した、えみしらが、敎ましゝり、韓松の、國となれるた、空蟬の、人はおほけと、常世涙、重涙よする、神風の、伊勢國、さく鈴の、すゝのやのたち、本居の、うしの命は、かしこきや、神にませれば、燒鎌た、手にとりもたし、からたちか、枝斷はらひ、敏鎌とり、うはら刈りそけ、いさたしく、道作らせり、此翁か、たしへおかすハ、神國の、みちは盡、萬代に、埋もれましたあれゆかました、

反歌　天地の神につきてハ此たちたあふけもろ〳〵おもちゝのこさ

跋

敷田年治翁は、我大阪の近世史を飾るべき、異彩ある人物たるのみならず、又實に大阪に於ける掉尾の一大國學者たり。予の先考賀親は、翁と時を同うし、學問、嗜好亦同じきの故を以て、交る所亦頗る深かりき。予前年家祖の歌集を刊行せんとして、其材料を蒐集整理するに際し、翁の遺墨を觀、遺稿を讀みて、其學識の深遠と人格の偉大とに驚嘆し、敬慕の念轉た切なるものあり。而も翻つて翁の事蹟の多く世に知られざるを思ふに及んでは、遺憾の情亦更に大ならざるを得ざりき。

曩日畏友望岳樓主人予が小廬を訪ひ、談偶ま翁の事に及ぶ。予告ぐるに翁の事蹟の世に知られざる事を以てし、深く之を慨す。君亦予と感を同うし、乃ち翁の小傳を記して、之を關西日報紙上に掲載すべきことを約せらる。予深く君の厚意を謝し、家藏の翁の遺墨及び翁の高弟角正方君の所藏に係る、翁の遺稿、其他翁に關する斷片的記錄を併せ、之を資料として提供す。君直ちに翁の小傳を編輯して。關西日報紙上に連載せらる。雄健の筆、精到の評、一讀して讃嘆禁すべからざるものあり、予因て惟へらく、日刊紙は散逸の虞あり、

若かず之を一小冊子に編し、以て保存に便ならしめんにはと。乃ち君に圖り若干の修正増補を爲し、之を欹厥に附する事とせり。然るに事忽卒に出て、材料蒐集の暇なく、加之日刊紙の掲載亦自ら制限ある等百事意を滿す能はず。成る所遂に畧傳の範疇を出ずして、畢竟偉人の片鱗を視めすに過ぎざるは、予の甚だ遺憾に堪ざる所とす。唯冀くは篤志の人他日此の小冊子を一材料として、偉大なる翁の爲め、更に完全なる傳記を編纂刊行するの、一大美擧に出られん事、是予が切に希望して止まざる所なり。

大正十五年三月中浣

賀功室谷鐵膓

大正十五年四月二十日印刷
大正十五年四月廿五日發行

版權所有

著作者　高梨光司

發行者　大阪市北區堂島中二丁目三十番地　室谷鐵膓

印刷者　奈良縣奈良市般若寺町二十一番地　八田德治郎

發行所　大阪市北區堂島中二丁目三十番地　播仁文庫　電話北一〇〇四番

163
112